

# サピアの言語史研究の原理 —*Language* (1921) 第9章「言語接触論 (借用論)」の真実—

三輪 伸春

## An Attempt at Unprecedented Interpretation of Chapter 9 of Sapir's *Language : An Introduction to the Study of Speech* (1921)

MIWA, Nobuharu

### Abstract

Sapir's *Language : An Introduction to the Study of Speech* (1921) is still appreciated and widely read all over the world as one of excellent manuals for the students of linguistics.

However, despite its popularity, there is neither an introductory article concerning the general plan of Sapir's linguistic thought nor instructive guidebook for the students. This thesis is an attempt to clarify and explain Sapir's newly offered linguistic way of thinking particularly on the history of language unknown so far.

Sapir's *Language* can be classified into five parts: fundamental principles (chaps.1 to 3), synchronic linguistics (chaps.4 to 6), historical linguistics (chaps.7 to 9), semiology (ch.10) and poetics (ch.11). This classification means that Sapir's *Language* is deliberately designed as a suggestive introduction to the modern linguistics including semiology and poetics.

Sapir's deep insight condensed in *Language* is not easy to realize, because, paradoxically enough, the book is written in everyday English avoiding technical terminology and was dedicated "within the space of two months, using only a few hastily-scribed notes" (Mandelbaum, p. xi). In particular, chapter 9 "How Languages Influence Each Other (in reality, Sapir's revolutionary view on "borrowing")" has to be taken particular notice. In the traditional historical linguistics, "borrowing" has been regarded as a subsidiary perspective in comparison with the most important "phonetic law", but Sapir offered, in connection with borrowing, three unprecedented perspectives: the newly-discovered relation between "borrowing and drift", "(historically) contrastive perspective" (*Language*, p. 219), and the Na-Dene linguistic family (ibid.), but taken no notice so far. The recently released hypothesis on the route of Homo sapiens after its departure from Africa and the distribution of Na-Dene linguistic family overlap each other.

**Keywords** : Sapir, Indo-European comparative linguistics, Na-Dene linguistic family, historically comparative perspective, borrowing, drift

### 要旨

今までにサピアの *Language* の全体構成を明らかにした記事はないようだが、全11章を各章の内容に従って、基本原理第1, 2, 3章, 共時言語学第4, 5, 6章, 歴史言語学 第7, 8, 9章, 記号論 第10章と, 詩学 第11章に分類するとサピアの *Language* が現代でも言語学概論として十分通用する構成になっていることがわかる。ところが, サピアの計画は少なくとも現行版の10倍ほどの内容を1冊に詰め込んだために中身があまりにも濃縮されているうえに, 短時日のうちに口述筆記

されたままなのでサピアの意図は十分に理解されていない (Mandelbaum, p. xi)。本稿は *Language* の第9章「言語の相互影響」を中心にサピアの言語史研究の原理を明らかにする。

*Language* が名著と評価されながら十分理解されていないのには内容にも原因がある。第1, 2, 3章と第4, 5, 6章はアメリカ構造言語学 (共時言語学, 記述言語学) の誕生と進展に貢献した内容であり, その創始者とされるサピアの真骨頂といえる内容であり, 十分に理解されていると思われる。しかし, 後半の第7, 8, 9章は歴史比較研究法を論じている。ところが, 第一に, サピアの歴史言語学はフンボルト, ボアズなどの言語学の原理を背景に19世紀の印欧比較言語学の厳しい批判なので, 印欧比較言語学を心得ておかないとサピアの意図がわからない。第二に, 印欧比較言語学がヨーロッパの文字言語だけを対象とするのに反し, 無文字言語の Na-Dene 大語族を含めたまったく新しい普遍的な比較言語学を意図して書かれている。同じ歴史比較言語学といっても「【歴史的に見た】対照言語学的視点」など発想が根本的に異なるので印欧比較言語学のつもりで第7, 8, 9章を読んでも理解できない。第9章は単なる言語接触論ではなく言語史論の核心的な問題が高尚な文体で論じられている。第10, 11章はそれぞれ「記号論」, 「詩学」を意図して書かれている。時代を先取りしすぎているためにサピアの意図は現在でも理解されていない。最近明らかにされた, アフリカ出立後のホモ・サピエンスのアジア方面進出のルートはサピアの提唱になる Na-Dene 語族の分布と一致するという見解はサピア解釈に重要な意味を持つ。

キーワード: サピア, 印欧比較言語学, Na-Dene 大語族, 【歴史的に見た】対照言語学的視点, 借用, 駆流

## §0. サピアの *Language* の構成

筆者の知るかぎり今までにサピアの *Language* の全体構成を明らかにした論考はないようだが, 全11章を各章の内容に従って第1部から第4部に大きく分類すれば明晰な言語学概論としての全体像が明らかになる<sup>1</sup>。そしてサピアの意図がみえてくる。

【第1部：言語学の基本原理】	
第1章	序論—話し言葉の定義
第2章	話し言葉の要素 (話し言葉と内的言語構造の2層構造)
第3章	言語の音声 (音声と音素の2層構造)
【第2部：共時的原理】	
第4章	言語の形態—形態の仕組み (形態と概念の2層構造)
第5章	言語の形態—形態からみた概念
第6章	言語構造の類型
【第3部：通時的原理】	
第7章	歴史的所産としての言語：駆流の2層構造 駆流1：個別言語にみられる表層の駆流 (英語)
第8章	歴史的所産としての言語：音韻法則 駆流2：同族言語間にみられる深層の駆流 (英語とドイツ語) 駆流3：人類の言語間にみられる普遍的な「駆流」
第9章	言語接触論 (表層の借用と深層の借用 = 駆流)

1 三輪『新たな英語史研究をめざして』開拓社, 2018, p.189.

【第4部：記号論と詩学】	
第10章	言語と人類と文化・歴史（記号論：クローチェの人類の2層構造）
第11章	言語と文学（詩学：クローチェの詩学＝表層の詩と深層の詩の2層構造）

この表を見ればサピアの *Language* が現代でも言語学概論として十分通用する構成になっていることがわかる。ところが、もともとの計画としては少なくとも現行市販本の10倍くらいの内容を1冊の一見概論風の書物に詰め込んだために中身があまりにも濃くなっているうえに、短時日のうちの口述筆記されたままなのでサピアの意図は十分に理解されているとはいえない。本稿は、*Language* の第9章「言語接触論（借用論）」を中心に従来指摘されていないサピアの言語史研究の原理を明らかにする。

サピアの *Language* が名著と評価されながらいまだに十分理解されていないのには理由がある。

第1部（1, 2, 3章）と第2部（4, 5, 6章）はアメリカ構造言語学の誕生と進展に貢献した内容である。その意味ではアメリカ構造言語学（共時言語学、記述言語学）の祖とされるサピアの真骨頂といえる内容であり、十分に理解されていると思われる。後半の第3部（7, 8, 9章）は言語の歴史的研究法を論じているが、サピアの歴史言語学は19世紀の印欧比較言語学の厳しい批判なので、印欧比較言語学を心得ておかないとサピアの意図がわからない。また、同じく歴史言語学といっても発想が根本的に異なるので印欧比較言語学のつもりで第7, 8, 9, を読んでも本当に理解することはできない。また、第10, 11章はそれぞれ「記号論」、「詩学」を意図して書かれているがサピアの意図は理解されていない。

## §1. 「話し言葉（speech）」と「言語（内的体系としての language）」の誕生

従来の印欧比較言語学は書き残された文献だけを資料とし、ヨーロッパ世界しか視野に入っていない。対象とするタイムスパンも、印欧比較言語学は文字の記録の残る4000年前頃以降とする。これに対し、書き言葉以前の話し言葉も対象とするサピアはホモ・サピエンスの誕生した20万年前以降を念頭に置いている。サピアは話し言葉（speech）の誕生について以下のように書いている<sup>2</sup>。

(1) 話し言葉（speech）【ソシュールのパロール（parole）】のすべての内的体系【音声と文法の体系】が単一のまったく新たなものからの歴史的発生であるかどうかは別にして、およそ言語というものは計り知れないほどの太古の昔からの人類の遺産である、と信じないではいられない。人間の文化的遺産のうちで、火を得るためにキリをもむ技術にせよ、石を削る技術にせよ、話し言葉よりももっと古くからあったと主張できるものがあるかどうかは疑わしい。話し言葉は最も初期段階の物質文化よりもなお先んじて生じており、実は【音声と意味を整えて】意味をなす表現の道具として【組織だった言語が】はっきりとした形をなすまではほかの物質文化の発達は不可能であったと信じたい。

（Sapir, *Language*, 1921, p.23。【 】は筆者の補足）

2 訳は筆者。紙数制限もあり英語原文（初版本）からは必要な場合のみ。

言語【language = 組織だった音声と文法の内的体系】の誕生についてサピアは書いている。

(2)【理性誕生以前の】過去のある時代に民族の無意識の精神【総意】が性急に経験の目録【カテゴリー】を作り、改定を一切許さないような早まった分類に踏み切ったあげく、その言語の継承者たちに、彼らがもはや全面的には信じてもないし、かといって捨て去る力もない「知識の体系【言語の体系のたとえ】」を押し付けたようなものだ。ドグマ【言語の体系のたとえ】は、いったん伝統によって厳格に規定されれば、硬直して形式主義におちいる。言語のカテゴリーは、残存するドグマ―無意識のドグマ―の体系を作り上げる。

(Sapir, *Language*, p.105)

言語の誕生は人間の理性が誕生する前に、無意識のうちになされたとすれば、言語の変化も個人個人の無意識のうちになされる<sup>3</sup>。

(3) 言語のもろもろの構造ともろもろの歴史的過程は(…), 思考の心理と人間の生命現象の中にみられる不可思議な累積的な駆流（これをわれわれは歴史、発達、進化とよんでいる）のなかにみられる【言語と芸術よりも】さらにむずかしくとらえどころのない問題のいくつかを理解するのにふたつとない治療的価値を有している。この価値は主に無意識と理性の誕生以前の言語構造の性質に依存する。

(Sapir, *Language*, preface, p. v. 下線, 筆者)

人間がもっとも初期の物質文化である石器を初めて作製したのは約200万年前のホモハビリスである。旧石器時代の狩猟採集の生業形態が長期にわたって続いた後に開発された初期農耕とユーラシア内陸部に始まった牧畜・遊牧の生活と文化は人類の生活に大きな変化をもたらした<sup>4</sup>。特に、7~8000年前に始まった本格的農耕の発達とそれにとまなう新しい社会的、経済的、そして文化的な生活はそれまでは小さかった民族集団<sup>5</sup>の大規模化を促した。そして農作物の成長と、太陽と月が年々歳歳繰り返す規則的な季節の移ろいととの相関関係は早くに知られていた<sup>6</sup>。ストーンサークルと農業文化の発達は言語の裏付けなくしては考えられない。このことはイギリスのストーンヘンジの建設が時期を同じくする紀元前6000年前であることと無縁ではない。というのは、ストーンヘンジは現代科学の先端技術をもってしても今なお解明しつくせないほどの天文学的知識をもって作られている。冬至、夏至はもちろん四季折々の天体の運動を計算しつくして作られているのである。ストーンヘンジを中心としてイングランド、スコットランド、ウェールズ、アイルランドにわたって総数2000を超えるストーンサークルはすべて農業技術の発達と連動して作製されている。ストーンサークルの祖型であるオークニー島のプロガー、ルイス島のカラニッシュ両ストーンサークルからもっとも有名なイングランド南部のス

<sup>3</sup> preface, iv.

<sup>4</sup> 松本克己『世界言語の人称代名詞とその系譜』p.8, 2010, 三省堂。

<sup>5</sup> 現在でもアフリカの無文字社会の国家、民族は小規模である。

<sup>6</sup> 世界中の巨石建造物の多くは天文と農業の各種技術の進展と連動している。

トーンヘンジ建設に至るまでに要した時間の長さは想像を絶する。

最近のストーンヘンジの調査からわかってきたことのいくつかをあげてみる<sup>7</sup>。

1. ストーンヘンジの構造は細部にわたり建設のための度量衡，幾何学の知識，技術が駆使されている。また，天体の動きと関係している。
2. およそ5トンのブルストーンは220キロ離れたウエールズのプレセリー山地から川を下りミルフォード・エイヴォンから海を越えてブルストル・エイヴォン川をさかのぼって運ばれてきている（運搬手段の詳細は不明）。最大で50トンのサーセン石は32キロ離れたファイフィールド・ダウンの採石場から運ばれてきた。
3. ストーンサークルのもっとも古い祖型をなすのはオークニー島のプロガーやストーンズ・オブ・ステネスである。そこから長い時間をかけて順次南下し巨大化している。
4. 放射性炭素年代測定法の結果，ストーンヘンジは紀元前3000年より前に作られており，エジプトのピラミッドやギリシャなど他の巨石建造物よりも前である。
5. 農業の画期的発展を証拠づける製粉用，脱穀用の石器など穀物関連の遺物と精神の発達を証拠づける祭壇の遺跡がある（6000年前のスカラブレイのストーンサークルにある竪穴式住居跡）。
6. ストーンヘンジの巨石建造にはエジプトのピラミッドとは著しく違う特徴がある。外郭の円形をなして並ぶ石柱の上に渡されたリントルは凹凸（さねはぎ継ぎ）によってジグソーパズルのように組み合わせられてずれないように噛み合わされている。同時に，リントルに施されたふたつのほぞ穴は，直立する石柱の頂上にあらかじめ作られたふたつのほぞと噛み合わせて乗せてありずれたり，落下したりしないようになっている。
7. 石柱は目の錯覚を計算して中ほどが太めのエンタシス構造になっている。エンタシス構造がギリシア以前にすでに考案されていた。
8. ストーンヘンジにくらべてエジプトのピラミッドは基本的に単純な方形の石を積み重ねただけである。
9. ストーンヘンジの真北27キロに世界最大のストーンサークル，エイヴベリーがある。周囲1.1キロもあり，中心にあるふたつのストーンサークルはどちらも直径が104メートルであり，ストーンヘンジより大きい。

ストーンヘンジの高等な建造技術は何千年，何万年という長い時間をかけた経験を積まないといけない。これだけの大事業を長い年月をかけて完成するには，有能なリーダーと多数の作業員の意思を統一し緊密な協力体制を必要とする。建設にあたっては正確な設計図を正確に記憶しておくことが必要であり，それに基づき作業員に各種の指示を正確に伝達するには高度に発達した共通の言語がなければならない<sup>8</sup>。

7 ロビン・ヒース・桃山まや訳『ストーンヘンジ』2009年，創元社。NHKBS プレミアム「奇跡の巨石文明ストーンヘンジの七不思議」2019.6.23.

8 わかりやすい例をあげる。仁徳天皇陵を古墳時代の工法で作った場合，延べ680万7千人を動員して25年8か月の年月を要するという（南日本新聞，2019，8，5）。

石器の発明から農業の発達までに長い時間がかかったがストーンヘンジの時代までに人類の生活、農業技術に大きな進歩が生じていたことが推察できる。天候、気候を予測することで小麦の量産化と質の向上、狩猟技術の向上、そしてこのような作業の経験の積み重ねには精度の高い言語が不可欠である。天体を含む自然界の仕組みの理解、家族生活の充実、宗教の発達、習俗の意識化などが進み、言語が単なる情報伝達機能ばかりではなく記号能力の発達が推進された。言語の創造的能力の発展である。また、ストーンヘンジの放射性炭素年代測定法により紀元前3000年よりも前と推定され、巨石文明が中東に発生して各地に広がったのではなく、逆に、ヨーロッパ北部に発生し地中海を経てギリシャ、エジプト、中東に伝播したことがわかる。書かれた文字より先に記憶に頼るだけの話し言葉にそれだけの経験と知識を蓄え伝える能力がすでに完成していた<sup>9</sup>。

言語の歴史は、人類の歴史、文化の歴史と不即不離である。サピアは、「発話主体がまだ理性を獲得する前に生じた言語」、そして話者の「無意識のうちに言語を動かしてゆく駆流」によって言語は突き動かされてゆき、ひとときもとどまることを知らない。それがサピアの言語観である<sup>10</sup>。

## § 2. Na-Dene 大語族—印欧比較言語学の見直し—

アメリカ構造主義（共時、記述）言語学の原点である無文字社会の共時的、記述的研究に貢献したサピアであるが、サピアの核心をなす言語観は歴史的であった。しかも、サピアが視野に入れていたのは、ヨーロッパ世界だけではない。サピアが系譜関係にあるとするセム、ハム語族から、氷河期にアジア大陸とつながったアラスカを経てアメリカに渡った北米先住民のナヴァホ、ヌートカ、ヤナといった諸言語を含む Na-Dene<sup>11</sup>大語族がサピアの興味を中心であったのである。北部アフリカから中東に及ぶセム・ハム語族、ユーラシアから北米の諸言語までの膨大な資料に基づき、サピアの透徹した言語観に裏付けられて書かれたのが *Language* (1921) である。Na-Dene 語族は20万年前にアフリカで誕生したホモ・サピエンスが6万年前にアフリカを出立し、ユーラシア、北米に版図を拡大したときにたどった道筋に連なる諸言語からなる大語族である。人類史上、ホモ・サピエンスがアフリカからアジアを経て南北アメリカに至った道筋とサピアの提唱する Na-Dene 大語族の東進の道筋と分布は一致する<sup>12</sup>。このことが本稿の最大の論点である。サピアは歴史的に系譜関係にある Na-Dene 語族の諸言語を中心にまったく新たな比較言語学の構築を意図していた。*Language* を読み解くためには、Na-Dene 語族を中心にユーラシアおよび北米の無文字社会の言語を視野に入れて、印欧比較言語学とはまっ

9 万葉集、古事記、沖縄の古歌、アイヌの神謡、アフリカの伝統歌謡。

10 'Languages are in constant process of changes...' Sapir, *Language*, p.153.

'His [Sapir's] interest was primarily historical, and with a phenomenal knowledge of it a wide field of facts he combined a rare intuition.' Boas, 1939 (Koerner, 1984, p.4).

11 セム・ハム語族、ユーラシア諸言語から北米先住民の Haida, Tlingit, Athapaskan 諸語からなる大語族。Mandelbaum (*Selected Writings*, pp. x-xi)。この語族の範囲は6万年前にアフリカを出立したホモ・サピエンスのたどった地域と重なる。

12 海部陽介はホモ・サピエンスの東進の道筋を明らかにしている（『日本人はどこから来たのか？』文春文庫、2019）。

たく異なる歴史言語学の存在を知っておく必要がある<sup>13</sup>。

サピアは *Language* で名前をあげて “Na-Dene 大語族” について直接言及はしていない。しかし、次のように述べている箇所がある。

- (4) I cannot but suspect that many of the more significant distributions of morphological similarities are to be explained as just such vestiges. The theory of “borrowing” seems totally inadequate to explain those fundamental features of structure, hidden away in the very core of the linguistic complex, that have been pointed out as common, say, to Semitic and Hamitic, to the various Soudanese languages, to Malay-Polynesian and Mon-Khmer and Munda, to Athabascan and Tlingit and Haida.

(Sapir, *Language*, p.219)

この引用文は、サピアの歴史言語学原理の証拠として言及されたきわめて重要な内容である。この引用中で、サピアは北部アフリカから中東を経てセム語族とハム語族、スーダン諸言語から、東南アジアのマレー・ポリネシア語、モンクメール語、ムンダ語、それに北米先住民のハイダ語、トリングッタ語、アサバスカン語をまとめて取り上げている。言及されたこれらの諸言語に言及した理由については何も述べていないが、実は、これらの言語はサピアが同じ一つの語族に属する「Na-Dene 大語族」と称している諸言語である<sup>14</sup>。これらの言語は、ヨーロッパ地域中心のインド・ヨーロッパ語族に対して、話し言葉（speech）のフィールド調査に基づくまったく新たな「【歴史的にみた】対照言語学的視点（contrastive perspective）」により歴史的に共通する特徴（「駆流、あるいはその証跡 “vestiges”<sup>15</sup>」）をもつ、いわゆる同族言語である、とサピアが認めた諸言語である。すなわち、文字言語・無文字言語にかかわらず世界中のホモ・サピエンスに普遍的な「比較言語学」の提唱である。言語の内的再建への提言である。言葉をかえていえば、ヨーロッパ中心で文字言語を対象にした印欧比較言語学に対して、世界中の大多数を占める無文字言語<sup>16</sup>をも対象にした比較言語学である。これらの北アフリカ、中東、ユーラシアの諸言語から北米に至る諸言語の膨大な証拠がサピアの言語論、言語史論の根拠となっていることを示した重要な一文である。ただし、サピアは所属する言語名を挙げただけで「Na-Dene 大語族とは、【歴史的にみた】対照言語学的視点に基づく証拠（「駆流あるいはその証跡」）により導き出された結論である」とはっきりと書いていないので、あげられた諸言語が何を意味するのか理解されていない。サピアがその証拠がどのようなものであるか述

13 *Language*, p.219. 梶茂樹「フィールド調査をしながら歴史言語学的研究を行うことは十分可能だし（…）歴史・比較言語学は、もはや、古い文字資料のあるインド・ヨーロッパ語系の研究者の専売特許ではない」『アフリカをフィールドワークする』1993, 大修館書店, p. 33f.

14 D. Jenness “Edward Sapir (1884-1939)” *Proceedings of The Royal Society of Canada*, 1939, 3<sup>rd</sup> series, vol.33 (1940), pp.151-3. Rep. *Edward Sapir: Appraisals of his Life and Work*, ed. K. Koerner, 1984, pp.9-11. 三輪伸春『英語史への試み』pp.77-8.

15 英語 “vestiges” は「痕跡」という消極的な意味ではなく「証跡」と訳すべき強い意味である。たとえわずかでも「駆流」が証拠として残されているからである。

16 「2005年版 *Ethnologue* によれば世界の言語の総数は6912」（松本, 2010, p.1）であり、そのうち文字を持つ言語は約400にすぎない。

べていないのである<sup>17</sup>。

ユーラシアから北米に至る多くの言語共同体に共通する歴史的特徴を俯瞰するにはことのほかすぐれた言語観察力が要請される。そのような観察力をサピアは「【歴史的にみた】対照言語学的な視点<sup>18</sup>」と称している。これらの諸言語に残されている音声・形態の類似点を「系統を同じくする言語間の駆流“drift”もしくはその証跡“vestiges”」として説明するには「借用論はまったく不十分である」<sup>19</sup>。これらの諸言語に残されている類似点を説明するには、借用ではなく「当該言語間の根底に流れる駆流とその証跡（vestiges）」に注目する必要がある。この「【歴史的にみた】対照言語学的な視点」という用語は全巻で3回しか用いられていないせいか注目されていないが、サピアの言語史論の背景となる重要なキーワードである。

当時、パウエルが北米先住民の祖語の総計を50としていたのをサピアは大胆にも6種類と規定したのも北米先住民の諸言語の「駆流と証跡」を「【歴史的にみた】対照言語学的な視点（contrastive perspective）」に基づきそれぞれの言語の内的体系を看破したうえでの結論に違いない<sup>20</sup>。

当該言語がたがいに離れていても、隣同士であっても安易に借用として片づけないで、底流として流れている「駆流（drift）あるいはその証跡」に注目すべきである。

サピアの言語史の原理といえば第7章に論じられているキーワード「駆流（drift）」がよく知られているが、実はサピアの「駆流」という考え方そのものも十分理解されているとはいえない。「駆流」は、たとえば「英語という個別言語に特徴的な歴史的傾向」としか理解されていない<sup>21</sup>。サピアの「駆流」は単に、個別言語の歴史にみられる特徴的な傾向ではない<sup>22</sup>。サピアの言語史原理の核心をなす概念である。その証拠に、「駆流」というキーワードは第7章に限らず *Language* の全体にくり返し用いられている<sup>23</sup>。「駆流」はサピアの言語観の核心におかれている重要な観点であり、第9章でその本質が論じられている。しかも同じ系統の言語であっても長い時間の経過ではっきりとした「駆流」と認識できなくなった場合も考慮して「駆流“drift”もしくはその証跡“vestiges”」として念を押している。サピアは従来誰も考えつかなかった意味で「駆流」を用いているので注意が必要である。「言語の誕生にかかわった無意識（unconscious）」と対をなして「人間の言語を突き動かす歴史的動因」であると理解されるべきものである。このような言語観はボアズ、フンボルト、ホイットニーの言語観を引き継い

17 刊行中のサピア選集には収録される可能性はある。

18 pp.218-9. 3回目は引用符付きである。p.218ではふと口に出たが、p.219ではこの語に新しい意味を与えようと意識していたように見受けられる。サピアの不親切の例。cf. Mandelbaum (*Selected Writings*, pp. x-xi) . C.F. Voegelin “Edward Sapir” 1952, p.35 (K. Koerner, 1984).

19 “the theory of borrowing seems totally inadequate” Sapir, *Language*, p.218.

20 C.F. Voegelin “Edward Sapir” 1952, (K. Koerner, 1984, p.35).

21 三輪伸春『英語史への試み』pp.33f.

22 第8章冒頭に「駆流には深みがあって複数の言語間に共通する場合がある」と記してある。“The general drift of a language has its depths” *Language*, p.183. 三輪伸春『ソシュールとサピアの言語思想』pp.126f. *Language* の訳者泉井久之助も、drift がひとつの言語にみられる歴史的特徴と誤解している。泉井『言語の世界』p.76.

23 参照の便宜上、岩波版のページ数を記す。preface, 222, 265, 266；第7章（頻出）；第8章 296, 299, 312, 322, 323, 324, 329 (x2)；第9章 344, 347, 348, 356；第10章 375, 378, 379, 376：vestige；354, 355。



でいることを表している<sup>24</sup>。渡部昇一は「ボアズの言語に関する論文は甚だ読みにくいものである。それに反し、サビアは実に読み易い<sup>25</sup>」と書いている。筆者にとってはサビアの英語はとうてい「読み易い」とはいえない。とてもむずかしい。その理由がここにある。サビアは、いちいち断っていないが、ソシュール、ボアズ、フンボルト、ホイットニー、心理学者ウイリアム・ジェームズといったふつう読まれていないような難解な言語学者の思想を読み込んで自家菜籠中のものとしている。したがって、サビアを読むときにはそれらの学者の言語思想を、少なくともある程度は、把握しておく必要がある。そこではじめてサビアを「易しく」読めるのである。逆説的だが、用いられている英語に本来語が多くやさしく見えるのでサビアを読んでもむずかしいという気にはならないが、読後の印象としては「わかったような気はするがつかまえてどころがない」という隔靴搔痒の印象を抱くのはこのことが原因である<sup>26</sup>。

そして、*Language* の全巻を通して一貫する人間の言語に特有の原理が「言語の持つ表層面と深層面」という2層構造という原理である<sup>27</sup>。「表層をなす発音器官と聴覚器官」と「深層をなす脳内の内面的な言語体系」という2層性、「表層の物理的な音声」と「深層の心理的な音素<sup>28</sup>」という2層性、「表層の形態」と「深層の意味」という2層性。「駆流」は「個別言語にみられる表層の駆流」と「歴史的に系統関係にある言語間に共通にみられるより深層にある駆流」（例、英語とドイツ語の「大母音推移」に共通にみられるゲルマン語の駆流）、それに「無意識」と人間言語のすべての深層にみられる、言語に力動性を与える「駆流」という2層性。そして、サビアがもっとも言葉を費やして説明に神経を使っているのが「借用」にみられる「表層の借用」と「深層にみられる借用」である。借用とみなされていた現象が実は借用ではなく、深層における「駆流もしくはその証跡」である場合があるので特に注意が必要である。この点が *Language* の218ページで慎重に論じられている。サビアは従来印欧比較言語学で安易に借用とみなされていた言語変化をすべて見直しているといっても過言ではない。

### §3. あらためて *Language* 「第9章 言語接触論（借用論）」を読む

サビアは第9章 “How Languages Influence Each Other” の冒頭で「完全に孤立した言語や方言を指摘するのは困難だろう。特に、原始民族のあいだでは」として借用はいつでもどこにおいてもみられる現象であるという<sup>29</sup>。

そして、まず、一般的な借用について述べている。借用の結果については、文化、政治、経済の中心にある大言語が周辺の弱小言語に与える影響は大きい。中国語が何世紀にもわたって韓国語、日本語、アンナン語に洪水のように流入し続けたのはこの例である。日本人は漢語な

24 「サビアはまず第一に、過去の伝統の継承者であったことに注目しなければならない。ボアズ（...）、フンボルトの学統をも引き継いだ」渡部昇一「サビアの現代的意義」p.8。p.9にはクローチェ、ホイットニーの名前があげられている。

25 渡部昇一「サビアの現代的意義」p.5。

26 安井稔「サビアの秘儀」『英語学の門をくぐって』1997, p.128f. 拙稿と渡部昇一（1979）を読めばサビアが格段に「易しく」なる。

27 サビアは「2層性」とは明記していない。これもサビアの不親切。

28 サビアは「音素 (phoneme)」という用語は用いていない。

29 *Language*, p.205. アフリカの生活、言語状態を知れば納得できる。梶茂樹, pp.21f.

しには論説体の文を書くことは不可能である。英語は、ノルマン人のノルマン・フレンチから膨大な数の語を借用し、文法的要素となる若干の派生接尾辞も借用した (princess, drunkard, royalty)。英語の分析的傾向もフランス語の影響であるという学者もいた<sup>30</sup>。

結局、世界中で周辺の言語に大きな影響を与えてきたのは古典中国語、サンスクリット語、アラビア語、ギリシャ語、ラテン語という五つの言語だけである。逆に、英語、日本語などが他の言語の中核に与えた影響はまったくない。

次に、サピアは「借用は受け入れられるのが当然」という従来の学界の見解に、言語学的見地に立った反論を提起する (*Language*, p.208)。

従来、借用が受け入れられるか否かはひとえに文化的な関係できまると考えられてきた。たとえば、英語と比べてドイツ語がラテン語やフランス語からの借用語が少ないのはドイツが古典時代のローマやフランスの文化圏と密接な関係を持っていなかったからとされてきた。このような言語における借用という現象を言語外的な視点から考察することをサピアは否定している。ノルマン人のイングランド征服によって英語には多量のノルマン・フレンチが流入したという政治上の理由は言語の問題とは別個に考えるべきである、という。言語に関する問題はあくまでも言語の内的問題として考えるべきであって言語の外的事情に原因を求めるべきではないというのである。借用が多いか少ないかの原因は、借用する側の言語自体の外来語に対する心理的な態度にある、という (安藤 訳 P.338)。たとえばドイツ語は外来語にも「分析可能な要素 (polysyllabic words strive to analyze themselves into significant elements)」であることを求める。他方、英語は「語全体としてひとまとまり (unified, unanalyzed word)」を求める性質がある<sup>31</sup>。

サピアは、無文字社会の言語を記述する作業から言語の内的再建への道を開き、新たな通時言語学を提示し、広い視野に基づく研究の必要性を説いた。いちいち出典を記していないが、その背景には、ソシュール、ボアズ、フンボルト、ホイットニー、心理学者 W・ジェームズ、クロウチェなどの先行学者の研究成果が背景にある。それだけの内容が *Language* には盛り込まれている。ところが、サピアはこれだけの内容を「わずか2ヶ月で走り書きの覚書をもとに」口述して完成させた<sup>32</sup>。その際、用語の混乱を避けるという推敲がなされていないようである。たとえば、特に第9章末には、用語の不統一がみられる<sup>33</sup>。読解するには注意が必要である。form と morphology とがくり返し並行して用いられている。「極力学術用語を避けている」<sup>34</sup>サピアが第9章「言語接触論」の末尾 (pp.217ff.) では、深層のパタンを表す form と区別して表層の形態 (形態素) を意味するためにやむをえず別に未成熟の外来語の用語 morphology, morphological をくり返し用いている。深層の form と違う意味で用いられているので注意が必要である。form は本来語の「形態の内的パタン」で歴史を経ても変わらない場合を指す。例: wis-dom, free-dom, like-li-hood は本来語の内的パタンに属する。一方、

30 サピアはこれをはっきりと否定している (*Language*, p.206脚注, pp.215f.)。cf. 「英語の be + 過去分詞による受動構文と have + 過去分詞による他動詞完了の構文はゲルマン語時代にすでに整っていた」 (バンヴェニスト, 『一般言語学の諸問題』 p.197, みすず書房)。

31 *Language*, pp.208f.

32 “within the space of two months, using only a few hastily-scribbled notes” Mandelbaum, 注13参照。

33 *Language*, pp.217f.

34 preface, iv.

morphology, morphological は「表層の形態（形態素）」を意味する。例：material-ize, pig-ment, ora-tion, defini-tion は語幹も接尾辞もともに純粋な借用語であり，odd-ment, starva-tion は本来語の語幹に内的パターンには組み込まれていない表層の形態素が付加された場合であり，英語の形態パタンの中核には組み込まれていないという区別がある。

外来語である diffusion と divergence は「（借用後の）伝播と拡散」であり borrowing 「借用」とほぼ同じ意味で用いられている。外来語 vestige は「（本来の drift 駆流に由来する）証跡<sup>35</sup>」である。複数の言語に残る「駆流の証跡」と借用とは「対照言語学的視点」により厳密に区別しなければならない。地理的に遠く離れた言語間の類似した現象はそれらの言語の祖語に由来する駆流の証跡である場合があるので借用とみなしてはいけない。われわれには、関係する複数の言語が系統を同じくする（祖語を同じくする）ことを否定するだけの証拠は持ち合わせてはいない<sup>36</sup>。たとえば、バスク語とフィンランド語、英語とアイルランド語には同じような言語現象がみられる。それらは「借用」ではなく、同じ祖語から受け継いだ「駆流の証跡」である<sup>37</sup>。

言語学概論として予想される内容の第8章までに比べて、第9章は借用論を扱いながら言語の本質を追究してきた偉大な言語学者たちの成果に加えて、サピアの深い思索が加わって非常に重い1章になっている。借用は、印欧比較言語学の方法論としては音法則に比べて副次的な位置づけであったが、*Language* ではサピアの言語史研究の原理として論じられている<sup>38</sup>。「借用」が表層の借用と深層の借用の2層に区別されてサピアの言語の2層論のひとつに加えられている。表層の借用は、受容する側の言語の内的パターンに組み入れられていない、あくまでも副次的な借用<sup>39</sup>。深層の借用は、従来借用とみなされてきたが実は受容する言語の内的パターンに属する「駆流（もしくは証跡）」である場合があるのでサピアは注意を促している。単なる「借用論」ではなくサピアの「言語は2層をなす」という言語本質論にもとづき、借用と駆流が厳密に区別されているのである。

第9章は、*Language* の中でも短い章であるが、サピア独特の歴史的観点の真髓が凝縮されている重要な章である。サピアは初めて言語の歴史における「借用」の意義を問い直しているのである。

言語における「駆流」と「無意識」の作用の結果として、言語はあらゆる生物のうちで人間だけが持つ真のコミュニケーション能力の手段としての「記号」という視点から考察されるべきである<sup>40</sup>。人間は発展途上のある段階で、本来は生理的、物理的な器官である口腔と口腔内

35 「本来の駆流であった証跡となる痕跡」であって、「単なる痕跡」という消極的な意味ではない。

36 *Language*, p.218.

37 *Language*, pp.218-9. ただし、サピアは具体的には述べていない。

38 借用を重要視するバルトリは、「借用以外はなにもも認めず「法則」は存在しない」とさえ言っている高津春繁『比較言語学』p.139.

39 *Language*, p.212. 副次的な借用は“イエリイ (yeri)”，ドイツ語の鼻母音など。

40 ホモ・サピエンスに先行するすべての人類は言語能力を持たず絶滅している。ただし、ある時期ホモ・サピエンスと共存したネアンデルタール人は現在の世界人口の1.5～2.1%は残存しているという（海部陽介『日本人はどこから来たのか？』p.44）。ネアンデルタール人の脳はホモ・サピエンスと酷似しており、ホモ・サピエンスの前段階の脳を持ち、完全な言語運用能力は持たないにしても潜在的にある程度の言語能力を持ち、ホモ・サピエンスと共生することにより言語能力を育成したと思われる。

の消化器官を発音器官として併用し、聴力を内面的な脳の働きと連動させて、ほかの生物の単純な情報伝達能力とは次元の違う「内的体系」としての言語運用能力を獲得した<sup>41</sup>。これが人間の記号能力であり、言語の創造性を生んだ。

#### § 4. 終わりの始め—結びに代えて—

最近、語彙統計学、遺伝子系統の研究、農耕・牧畜技術の発達と言語との関係、世界の人称代名詞にみる言語変化という4つの視点からサピアの主張を現代風に証明する研究が現れた。松本克己先生の『世界言語の人称代名詞とその系譜—人類言語の5万年の系譜』(2010, 三省堂)である。松本先生は、上記の4つの視点からの確な方法論を簡潔な表現で展開している<sup>42</sup>。ここでは、本稿 §1でも触れたストーンヘンジと農耕・牧畜文化の発達と言語との関係 (§4.1)、それに世界の人称代名詞にみる「言語の内的体系」 (§4.2) の2点を簡潔にのべて今後のサピアの言語史研究への道しるべとする。

##### § 4.1. ストーンヘンジにみる農耕・牧畜技術の発達と言語の相互影響

サピアは言語学を研究するものは言語学専門という狭い世界に閉じこもっていないで広い視野を持たねばならないという。

(5) Knowledge of the wider relations of their science is essential to professional students of language if they are to be saved from a sterile and purely technical attitude.

(Sapir, *Language*, preface, p. iii)

ホモ・サピエンスと呼ばれる現生人類がアフリカで誕生したのは15万～20万年<sup>43</sup>前とされる。その後、5～6万年前にユーラシア方面に出立した。人類はこの時期までに現在の世界の言語のもととなる話し言葉を獲得していたと思われる。アフリカ出立後、3～4万年間は狩猟と採集を主体にごく小集団で社会生活を続けてきたと考えられる。その後、後氷期には温暖化によりそれまでとは全く違った環境となった。そして1万2千年から1万年前以降の完新世になると、農耕、牧畜技術に著しい変革が進んだようである。ひとつには、そもそも約15万年間アフリカにとどまっていたホモ・サピエンスが6万年前にアフリカを後にして見知らぬ新世界へと旅立ったこと自体がかれらになにか精神的に特段の変化が生じた証拠である。アフリカの生活が物足りなくなり、まったく新しい世界を求めて旅立たせるように促した契機はなにか。ほかの生物にはない「想像力・創造力」を持たせる動的要因が彼らの精神世界に芽生えていたのではないか。セミが7年間も地中に安全な生活を送りながらあえて危険な地上の世界へ踏み出してゆく動因は生物の本能である子孫繁栄の責務を果たすためである<sup>44</sup>。ホモ・サピエンスは言語という精神世界を広げようとする第二の本能ともいえる能力を持ったことによりいつまでも

41 動物は、未来や過去を表現する能力を持たない。時間、空間を超えはることができない。

42 特に、同書、pp.1～28.

43 年数は推定。異論もある。

44 極端な例では、カゲロウは生殖機能だけを持って朝方誕生し、夕方には死ぬ。

アフリカという世界にとどまることに満足できなくなってアフリカを離れ、新世界を旅する夢を抱いたと想像できる。

アフリカを出て、新しい世界でいろいろな環境でいろいろな自然に遭遇し、いろいろな新しい経験を積み重ねるうちに言語もそれに伴ってあらたな機能を拡充していった。従来の狩猟採集の作業にも改良が加えられていった。加えられた改良は言語によって継承され、さらなる改良を加えて累進的に進歩していった。そのような状況が1万2000万年から1万年前に全人類に多発的、かつ爆発的に生じて人類の生活、文化、経済、産業構造は飛躍的に発展した。生活、産業の道具は土器、石器から金属も加わって産業の能率化がいちじるしく向上した。このような時期と天体観測も可能なストーンサークルが世界中で量産された。ホモ・サピエンスがユーラシアからアメリカに渡ったのもこの時期のことである。

サピアは、石器を作製し、火を活用することを知った時期にはすでに言語運用能力を獲得していたという。この種の技術は言葉によって子孫に継承されなければ後世に伝わることはありえないからである。1万年から1万2千年前の急速な産業構造の発展とストーンサークルの建造というふたつの事件は偶然ではない。この時期に農業と天体の運動に関する知識が蓄積されて農業の効率化、増産化、産物の品質向上が図られた。同時に、ストーンサークルが考案されて、その規模、精度も連動して発展した。産業構造の発展とストーンサークル建造のための技術の進歩には精緻な言語の発達が必要である<sup>45</sup>。

ストーンサークルの建設という視点から言語に接近するのは、サピアの言う「言語研究の専門家も、ひとえに専門的な見方しかできない態度から救われたいのなら、言語に関してより広いかかわりを知ることが絶対に必要である」という見解（引用5）に適合する。ストーンヘンジと言語の発達とのかかわりは著しく有用であると考ええる。

#### § 4.2. 印欧比較言語学における人称代名詞—「内的体系（パタン pattern）」の1典型<sup>46</sup>

サピアは言語の内的体系は簡単には変化しないとして次のようにいう。

- (6) Every phonetic element that it possesses may change radically and yet the pattern remain unaffected. It would be absurd to claim that our present English pattern is identical with the Old Indo-European one, yet it is impressive to note that even at this late day the English series of initial consonants:

p t k

b d g

f th h

corresponds point for point to the Sanskrit series:

b d g

bh dh gh

p t k

45 日本の最古のストーンサークルは秋田県を中心に6000年前の縄文時代にさかのぼる。

46 大きな問題なので先行研究への理解不十分、誤解、失礼はご海容を願うしかない。

(個別言語の音声パターン【音声の内的体系＝音韻体系<sup>47</sup>】は一定不変ではないが個々のパターンを構成する個々の音ほどたやすくは変化しない。パターンを構成するすべての音ほどたやすくは変化しない。パターンに含まれるすべての音声要素は根本的に変化する可能性がある。それでも、パターン自体は影響を受けないままである。現代英語のパターンは古い印欧祖語のパターンと同一である、などと主張するのはばかげているだろうが、今日のようなのちの時代でも、英語の語頭子音の系列はサンスクリット語の系列に一つ一つ対応していることに注意すれば、深い感銘を受ける。)

(Sapir, *Language*, p.200)

言語の内的体系が祖語のまま堅持されるこのような例は人称代名詞の体系にも見られる。

従来の諸言語の人称代名詞の記述は、ほとんどがギリシャ・ローマ以来の西洋古典語の文法にならったものであった。ギリシャの文法家ディオニュシオス・トラクスは書いている。

- (7) 人称は3つ、すなわち第1人称、第2人称、第3人称である。第1人称は言葉の発出者、第2人称は言葉が向けられた相手、第3人称はそれについて話されたものである。  
(Uhlig 1883:51; 松本克己『世界言語の人称代名詞とその系譜』p.8, 2010, 三省堂)

このように人称代名詞は1人称、2人称、3人称が備わっているのが世界の言語に普遍的な事実であるとされてきた。たとえば、言語普遍論で有名なグリーンバークは次のように書いている。

- (8) Universal 42, All languages have pronominal categories involving at least three persons and two numbers.

(普遍項目42:すべての言語は3つの人称のカテゴリと【単数と複数の】二つの数のカテゴリーを持っている。

(J. Greenberg, *On Language*, 1990, p.60)

しかし、バンヴニストは、3人称は人称ではないとしておおよそ次のように書いている。

- (9) 3人称は、1、2人称と同じ次元で一つのカテゴリーとしての人称を形成するのではない。というのは、3人称の代名詞の存在しないことと、大部分の言語における3人称の1、2人称とはきわめて異なるありかたとである。1人称と2人称は、3人称と同一のレベルにあるものではなく、3人称は常に異なったとり扱いを受け、真の動詞の人称としてはあつかわれていないこと、および三つの人称を一つのカテゴリーに分類することはこれらの言語の動詞に適合しないことで十分に明らかである。3人称は、はじめの二つの人称につきあわせて形成されたものである。

47 サビアはまだ phoneme (音素) と sound (音) という区別をしていない。

以上のことから、きわめて一般的に、人称は「わたし」と「あなた」の立場にのみ本来的なものであるということが結論される。じつは、【人称のカテゴリーではない】非人称的表現ではつねに3人称が用いられる。

「わたし」と「あなた」という人称の特質は、【「わたし」と「あなた」だけという】その特殊な唯一性にある。非人称表現ではつねに3人称が用いられる。最後に、【1, 2人称と違って】ものにだけ動詞の3人称の述辞が付与される。

(E. バンヴェニスト「動詞における人称関係の構造」『一般言語学の諸問題』

川村ほか訳, pp.203f., 1983, みすず書房。要約)

松本先生は、

- (10) 1人称と2人称は【ある場面において】ことばないし発話(speech)の【直接の】当事者として、一方は「話し手」、他方は話し相手すなわち「聞き手」を表し、どちらも言語使用者という点で、人間だけに限られたその意味で文字通り「人称 persona」のカテゴリーである。しかし、いわゆる3人称は、人間だけでなく発話の中で話題となるあらゆる事象、発話と発話を取り囲む外的世界一切をその指示対象の中に取り込んでいるという点で、厳密な意味での人称のカテゴリーを逸脱しているだけでなく、1, 2人称とは全く性格を異にする。(…)

(…) 厳密に人称と呼べるのは(…) 1, 2人称だけである。3人称とはまさしく“非人称”ないし“ゼロ人称”にほかならず、その位置づけは、人称代名詞よりもむしろ、(…) 広義の指示代名詞の枠内に納めなければならないのである。

(松本克己, 『世界言語の人称代名詞とその系譜』 pp.11f., 2010, 三省堂)

と述べて、3人称を人称のカテゴリーには含めるべきではない、という。

また、1, 2人称は1子音と1母音からなる単純な形態にもかかわらず印欧祖語の時代から安定した基幹子音を維持していることは特筆すべきであるという。この現象は世界の多くの言語にみられる。わかりやすい例をあげれば、現代フランス語の1人称、2人称代名詞を見ると以下のようになっている。

図1 フランス語の人称代名詞単数

	1人称単数	2人称単数
協調的独立形式	moi	toi
主語人称接語	je	tu
目的語人称接語	me	te
所有人称接語	mon/ma/mes	ton/ta/tes/

(松本克己, 『世界言語の人称代名詞とその系譜』 p.20, 2010, 三省堂)

フランス語のこの人称体系を支えているのは、1人称：m-, 2人称：t- という二つの基幹子

音である。そしてこの基幹子音はそのまま2千年前のラテン語にさかのぼり、それはそのまた5～6千年前の印欧祖語形をそのまま受け継いでいる<sup>48</sup>。3人称系にはこの安定した一定性はない。

サピアの引用(7)と図1のフランス語人称代名詞とは、印欧語系の言語の内的体系【パタン】の強固な性質を表現して余りある。一般的に、言語の内的体系とはこのように強固な性質を持つ。したがって、言語の借用が受容する側の言語の中核に及ぶことはほとんどありえない、とサピアは言う。

英語の場合、名詞、形容詞の性、数、格の活用語尾が消失されてきたことには触れるが、人称代名詞の屈折活用は古期英語時代からほとんどその姿を変えていないことに言及されることはない。が、実は、英語の人称代名詞も印欧祖語の時代の形態（1人称：m-, 2人称：t-）を堅持してきた<sup>49</sup>。

中期英語の人称代名詞単数

	1人称	2人称
主格	I	thou
属格	my, mine	thy, thine
目的格	me	thee

2人称単数形 thou, thy, thine は3人称複数 they, their them との競合で消失。近代期に入って英語が3人称の語頭子音に3人称を意味する th- 音を選択したためである。ここには英語固有の「駆流」が働いたと考えることができる。この交代劇は英語史研究にとって興味深い例となっている。

また、ソシュールはその *Cours de linguistique générale* (1916) の言語本質論を発話者と聴取者ふたりの対話、すなわち「話し手＝1人称」と「聞き手＝2人称」から始めている<sup>50</sup>。ソシュールは言語の本質である「Langue＝ラング」を規定するのに二人の会話から始めているのには理由がある。言語は普段だれの目にも見えない心理的な、潜在的な内的体系【パタン】である。そんな言語が具体的に目に見えて姿を現すのが唯一言語主体の発話する場面である。そこに登場するのは第1人称である「わたし」と第2人称である「あなた」の二人であってそれ以外はない。3人称は二人の会話に話題に上ることはあっても、人間だけではなく、発話で話題となるありとあらゆる事象、1, 2人称を取り囲む外界の一切切をその指示対象とするという意味で厳密な意味での人称のカテゴリーから逸脱しており、1, 2人称とは全く性質を異にする。このような1, 2人称と3人称の性質、用法の差異については世界の多くの言語にあてはまる。そして、3人称の形態が同じ言語内の歴史においても、あるいは違う言語間においても一貫性

48 サピアの引用(7)と図1、図2のフランス語と英語の人称代名詞とは、印欧語系の言語の内的体系の強固な性質を表現して余りある。

49 三輪伸春『あらたな英語史研究をめざして』pp.62f. ちなみに I am の -m は動詞の1人称単数直説法現在形の名残り。

50 Saussure, *Cours de linguistique générale*, 1916, pp.23f.



がないのに反し、1, 2 人称は印欧祖語の時代から基幹子音を中心にその形態を堅持してきた。松本先生は、人称代名詞の1, 2 人称に関するその事実を証拠に世界の言語の1, 2 人称代名詞の変遷から言語普遍論を試みた。

サピアはソシュールのラング (langue) 論の意図を完全に理解して *Language* の17ページで “The cycle of speech (ソシュールの la circuit de la parole の英訳)” として言及している。このことはサピアの言語本質論はソシュールの言語本質論に負うところが大きいことを表わしている。サピアが先行する先輩学者の言語本質論を継承していることをうかがうことができる。

世界の多くの言語に普遍的にみられる1人称、2人称代名詞の屈折体系の単純な形態ながら、不変の、安定した歴史に、サンスクリット語と英語の語頭子音と同様にサピアのいう言語の「内的体系【パタン】の強固さ」の1典型をうかがうことができる。

結局、サピアの *Language* は1921年に出版された当初から今日まで名著と称されてきたが、前半の共時的研究はともかく後半の歴史言語学は理解されることもなくほとんど無視されてきた。本稿の主張が、もし間違っていなければ、サピアの、時代を先駆けた歴史言語学者としての再評価がなされる契機になるだろう。

## 参考文献

- Sapir, E. *Language: An Introduction to the Study of Speech*, 1921, N.Y., Harcourt.  
『サピア言語－ことばの研究序説』木坂千秋訳, 昭和18年, 刀江書院。  
『言語－ことばの研究』泉井久之助訳, 1957, 1967, 紀伊國屋書店。  
『言語－ことばの研究序説－』安藤貞雄訳, 1998, 岩波書店。  
Benveniste, E. *Problèmes de linguistique générale* II, 1974, Paris, Gallimard.  
バンヴェニスト「動詞における人称関係の構造」『一般言語学の諸問題』川村ほか訳, pp.203f. 1983, みすず書房。  
クローチェ, B.『美学綱要』細井雄介訳, 2008, 中央公論美術出版。  
Greenberg, J. *On Language*, 1990, Stanford, Stanford U.P.  
ロビン・ヒース・桃山まや訳『ストーンヘンジ』2009年, 創元社。  
Jenness, D. “Edward Sapir (1884-1939)” *Proceedings of The Royal Society of Canada*, 1939, 3rd series, vol.33 (1940), pp.151-3. rep. ed. K. Koerner, 1984, pp.9-11.  
國司航佑『詩の哲学—B. クローチェとイタリア退廃主義』2016, 京都大学学術出版会。  
海部陽介『日本人はどこから来たのか?』2019, 文芸春秋社。  
高津春繁『比較言語学』1950<sup>2</sup>, 岩波書店。  
Mandelbaum, D.G. *Selected Writings of E. Sapir in Language, Culture and, Personality*, 1949, Berkley, Univ. of California.  
松本克己,『世界言語の人称代名詞とその系譜』2010, 三省堂。  
三輪伸春『英語史への試み』1988, こびあん書房。  
三輪伸春『ソシュールとサピアの言語思想』2014, 開拓社。  
三輪伸春『あらたな英語史研究をめざして』2018, 開拓社。  
NHK BS プレミアム「奇跡の巨石文明ストーンヘンジの七不思議」20019.

NHK プロモーション『日本人はるかな旅展』2001.

Saussure, F. de *Cours de linguistique générale*, 1916, 1972, Paris, Payot.

渡部昇一「サピアの現代的意義」『月刊言語』1979, No.2, 大修館書店.

梶茂樹『アフリカをフィールドワークする』1993, 大修館書店.

Koerner, K. ed., *Edward Sapir: Appraisals of his Life and Work*, 1984, John Benjamins.